

## オリエントの興亡

### 東地中海の岸边に

シリア、パレスチナにはセム語族系諸民族が歴史の跡を刻んだ。ヘブライは紀元前 15 世紀、パレスチナ（カナーン）に定住し始めた。紀元前 12 世紀の“出エジプト”、10 世紀の“ソロモンの栄華”など、民族の伝承と歴史は「旧約聖書」にその記憶をとどめている。北部のイスラエル王国は紀元前 8 世紀、アッシリア人の軍靴に踏みにじられたが、イェルサレムを都とする南部のユダ王国は、新バビロニア、ペルシアの攻勢に耐えて、民族の歴史を後代に残した。

ヘブライ人の勢力圏の北の地中海岸に、フェニキア人はシドン、ティルスなどの都市国家を経営した。地中海貿易に進出し、カルタゴを始め多くの植民市を作った。ジブラルタル海峡を抜けて北大西洋へ、インド洋へも航海したといわれる。ローマ人はかれらをポエニと呼んだ。カルタゴとローマの戦い“ポエニ戦争”の呼称の起こりである。

いまから 1 万年ほども前、“肥沃な三日月地帯”に、ナイル川の流域に人々と動物が集まって、農業と牧畜の生活が始まった。高台を築いて神殿とし、パピルス草の繊維を固めた紙に“死者の書”を書いた。シュメール人は“ギルガメッシュ叙事詩”を歌い、バビロニア人は法律を作り、ヒッタイト人が鉄の技術をもたらし、エジプト人が太陽神一神教を創始した後に、アッシリアの軍団がオリエントを制圧した。その帝国の崩壊の後、イラン高原からペルシア人がやってきた。

### 1. 文明の形成

いまから 2 万年ほど前、現生人類の祖であるクロマニヨン人や周口店上洞人は、打製石器や骨角器を使って狩猟採集経済を営んでいた。スペインのアルタミラやフランスのラスコー洞穴で発見された岩絵にその生活が描かれている。地質学の暦では第 4 氷河期で、やがて後氷期に入る。考古学の暦では旧石器時代の末期であり、やがて中・新石器時代へ移行する。新石器時代への移行は、よく研磨した石器（磨製石器）の出現と、農耕・牧畜の開始、定住生活と氏族制社会の形成によって特徴づけられる。イラク北部のジャルモ遺跡は、およそ 6500 年前のものだと推定されているが、麦類を耕作し、羊・山羊・豚などを飼育していた跡を示している。

農耕・牧畜の生活形態は西アジアに始まり、東西に伝播したと、文明の発生を一元論的に説明したがる学者はいまでもいる。西方は地中海とヨーロッパ内陸にひろがり、東方へは二波にわかれ、一つはインダス川に達して紀元前 3000 年紀（前 3000～前 2001）にインダス文明を成立させた。もう一つの波は中央アジアを経て黄河流域に達した。中国最古の彩陶文明がそこに成立したというのである。その真偽はともかく（インダス文明について

はこの説は否定されている)、西アジアが農耕と牧畜の発生に適した条件を備えていたことは確かである。

西アジアには、新石器時代に栽培されたエンメル小麦という品種の小麦の野生種がいまなお自生している。だから、栽培品種の小麦や大麦の祖種が野生していた可能性が高いのである。また、後氷期に入ると、西アジア一帯は乾燥してきた。アフリカ西海岸からイラン高原までしだいに荒地がひろがり、人間と動物は川の流域やオアシスに集住した。そこに人間と動物の共存関係が生まれたのである。この考え方は、ほぼ妥当なものとして、多くの学者によって認められている。

## 2. メソポタミアの夕映え

旧約聖書のノアの洪水伝説は、紀元前 3000 年ごろ、メソポタミアに文明を開花させたシュメール人の叙事詩「ギルガメシュ」にその祖型をもつという。シュメール人の社会はティグリス・ユーフラテス両河の河口域に展開した。ラガシュ、ウルク、ウルといった都市国家群の集合である。両大河の押し流す土砂が流路を変え、河口を埋める。洪水は自然の営みであり、治水灌漑と農耕、粘土板に楔型文字の商取引文書、干し煉瓦で築きあげる神殿（ジググラト）の文化がそこに生まれた。

シュメールの北にセム語族系統のアッカド人がいた。これが紀元前 2400 年ごろサルゴン王の下に開いたのがシュメール＝アッカド王朝である。この統一王朝が 150 年ほど続き、その後分裂の時代を経て紀元前 2100 年ごろウル第 3 王朝が立つ。シュメール文明の黄金期である。これもしかして紀元前 2000 年ごろ、メソポタミアの覇権をバビロニア王国に譲り渡す。シリア方面から移住したセム語族系のアムル人が、すこし上流のバビロンを都としておこした王朝である。古バビロニア王国とか、バビロン第 1 王朝とか呼ばれるが、とりわけ第 6 代目の王ハンムラビは名高い。今世紀初頭、ペルシアの古都スサで、法律の文章が刻まれた。高さ 2 m 余りの黒色玄武岩の円柱が出土した。これが「ハンムラビ法典」の原本であって、民法、刑法、訴訟法などに分類できる、かなり体系的な法律集成である。ハンムラビ王の治世年代については、古来論争があったが、いまでは紀元前 18 世紀と、研究者の見解は一致している。「ハンムラビ法典」は、紀元前 18 世紀のメソポタミア社会の現実を映している。

## 3. 鉄器文明へ

紀元前 16 世紀後半、古バビロニア王国はヒッタイト人（バビロニア人はハッチと呼んでいた）に滅ぼされた。これはインド＝ヨーロッパ語族に属し、すでに紀元前 17 世紀に小アジアに入り、ハットゥサに都して国家を建てていた。今世紀初頭、現在トルコのボガズキョイ村のハットゥサ遺跡から、多量の粘土板が出土した。ボガズキョイ文書といい、この解読が進められて、ヒッタイト社会の様子や、ヒッタイトとエジプトとの交渉など、紀元前 2000 年紀のオリエントの国際関係がかなり明らかになった。ヒッタイトはそれ以上バビ

ロニアに関心を示さず、代わってイラン系のカッシュ人がバビロンに入ってカッシート王朝を立てた。

ヒッタイト国家は、征服者である少数のヒッタイト人が、戦士的タイプの貴族として、多数の原住民を支配する形をとっていて、これはギリシア人やゲルマン人など、他のインド＝ヨーロッパ語族の民族に共通する性格であり、メソポタミア社会には異質のものであったと思われる。紀元前 14 世紀には鉄の技術を完成した。シリア海岸の覇権をめぐる、ヒッタイトはエジプトとしばしば交戦したが、その際、ヒッタイト戦士の鉄剣がエジプト人の青銅の矛を無造作に切り裂いたというイメージは、古来好んで語られてきたところである。

#### 4. 世界帝国へ

メソポタミア南部にウル第 3 王朝、バビロン第 1 王朝が栄え、小アジア半島からシリアにかけてヒッタイトが覇権を確立する。この悠久の時の流れに漂って、メソポタミア北部のティグリス川中流に、セム系を主力とする混成民族集団アッシリア人は、アッシュール、ニネヴェなどの都市国家を着実に経営していた。紀元前 12 世紀、かれらは動いた。この世紀の始めにヒッタイト王国が瓦解した原因の一つには、アッシリア人に王国の東南部を侵されたこともあったのである。

これが最初の兆候であった。アッシリアは四方に進出を開始し、紀元前 8 世紀、サルゴン王の代、メソポタミア、アルメニア、シリア、パレスチナを支配する帝国を築いた。紀元前 7 世紀には一時エジプトを支配したが、そのエジプトが“アッシリアのくびき”から逃れようと独立戦争を起こしたのが切っ掛けで、紀元前 612 年、帝国は崩壊し、エジプト、リディア、メディア、新バビロニア 4 国が併立する形勢となった。

この 4 国併立状態を克服したのがペルシア人である。これもヒッタイトと同様、インド＝ヨーロッパ語族の民族で、イラン高原に定着していたが、メディア王国成立後、アケメネス家のキロスの指導の下に、スーサに拠って独立し、ペルシア王国を興した。第 3 代ダレイオス（ダarius）1 世は、東はインダス川、西は小アジア半島の西岸、南はナイル川にいたる大帝國を建設した。アッシリア王国の遺制を活かしたサトラップ（地方行政区の長官）の制、“王の目・王の耳”（地方派遣監察官）の制、道路の整備、馱馬の制など、中央集権体制の整備がダレイオスの仕事として指摘されるが、ペルセポリスの都の壮麗、なんといってもこれこそがペルシアの大王ダレイオスの後世への最大の贈り物であった。

#### 5. ナイルの賜

シリアのレバノン山地におけるヒッタイトとエジプトの角逐は、紀元前 13 世紀前半、エジプト新王国第 19 王朝のラメス 2 世の代のことであった。ハム語族系農耕民族エジプト人がナイル川流域に築いた王国の王朝の系譜は、紀元前 2700 年ごろの第 1 王朝以降、すでに 18 の王朝を数えた。

その間 1500 年、ナイル川は毎年上流のヌミディア地方に雨季の気配を感じるや増水し、地味豊かな土壌を運んできた。エジプト人は移動を知らぬ移動農耕民であった。ただし、このばあい、移動するのはナイル川の作る農耕の環境の方であった。ナイルの住人たちは季節に鋤返される大地の作物であった。エジプト人の心性が死と死後の世界に強い関心を示したのは、このような生活環境とのかかわりにおいてであったろうか。死者の神オシリスの神話はナイル川の枯死と再生の物語である。

ピラミッド建造で知られる第 4 王朝の繁栄をピークに、ナイル川下流のメンフィスに拠った古王国が、王朝の交替の一つのサイクルを完了したあと、紀元前 21 世紀なかごろ、第 11 王朝が上流のテーベに拠って興隆した。ちょうどメソポタミアにウル第 3 王朝が成立したころである。これに始まる王朝のシリーズを中王国と呼ぶ。第 12 王朝の繁栄ののち、紀元前 17 世紀初頭、セム語族系遊牧民族ヒクソスが侵入し、ナイル川三角州を占領して王朝を開いた。第 15 王朝である。この異民族の王朝は 2 代 100 年間続いたが、その間馬と戦車の技術をヒクソス人から学んだエジプト人は、テーベに拠って反攻に成功する。第 17 王朝であり、その成果を受け継いだ第 18 王朝以降、エジプト史は新王国の段階に入る。

第 18 王朝はほぼ 200 年間も続いた大王朝であって（前 1570～前 1345）、トトメス 3 世（前 1502～前 1448）の外征、アメンホテプ 4 世、改名してイクナートン（前 1377～前 1358）の宗教改革で知られる。アメンホテプはテーベの南に新都を造営し、アケト＝アトンと命名した。現在のテル＝エル＝アマルナである。テーベの守護神アモンを主神とする自然崇拝多神教を停止し、太陽神アトンを唯一神とする一神教をおこした宗教改革は、彫刻をはじめ造形美術に清新の気を吹き込んだ。様式美を強調する従来の芸術に写実的手法を加えたアマルナ芸術と呼ばれる流派がそれである。これは、しかし、王の死後、アトン一神教の廃棄とアモン多神教の復活、テーベへの再遷都という情勢の推移のうちに、芸術における指導的流派としての地位を失った。

新王国の繁栄は、第 20 王朝のラムセス 3 世（前 1301～前 1234）の代を最後として終わる。第 18、19 王朝の時代には東方の諸勢力と覇を競ったエジプト王国も、以後、一地方政権として単調な起き伏しを重ねるうちに、やがてアッシリア、ペルシアのオリエント統一の策動に呑み込まれる。